

# 博士學位論文

—論文要旨および審査結果の要旨—

第 13 号

武蔵野音楽大学

## は し が き

本編は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の規定による公表を目的として、令和元年度に本学において博士（音楽学）の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

## 目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目	頁
博甲第22号	博士(音楽学)	児 玉 瑞 穂	ドレスデン及びライプツィヒを中心とする初期多鍵フルート — 18世紀後半から19世紀初頭までのフルート文化の拡がり —	1

氏名	こたまみずほ 児玉瑞穂
学位の種類	博士(音楽学)
学位記番号	博甲第22号
学位授与日	令和2年7月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文題目	ドレスデン及びライプツィヒを中心とする初期多鍵フルート — 18世紀後半から19世紀初頭までのフルート文化の拡がり —
論文審査委員	主査 教授 稲田隆之 副査 特任教授 寺本まり子 副査 講師 米田かおり 副査 講師 石井明 副査 荒川恒子 (山梨大学名誉教授)

## 論文要旨

本論文の目的は、ドレスデン及びライプツィヒを中心とするザクセン地域における初期多鍵式フルートとその製作者に焦点を当て、18世紀後半から19世紀初頭におけるフルート文化の多様性を明らかにすると同時に、その歴史的意義を示すことである。なお、本研究で取り扱う「初期多鍵式フルート」とは、バロック・フルート（1鍵式フルート）にさらに鍵を付加した楽器で、19世紀初頭までに製作されたものと定義した。

このフルートは、現代の標準型であるベーム・フルートへと至る過程の試行錯誤として捉えられることが多いという問題がある。また、一口に多鍵式フルートと言っても非常に多種多様なため、当時多く製作されたタイプ以外は、散発的に作られた実験的なものにすぎないと考えられてきた。

そこで本論文では、ザクセン地域、特にドレスデンとライプツィヒにおける初期多鍵式フルートに着目した。ドレスデンには当時の標準型となる楽器を製作する者がいる一方で、ライプツィヒには非常に独創的なフルートを考案する者もいた。実際のところ、このような独創的なフルートは一般には広まらなかったため、散発的に作られたその製作者の個人的なものという以上の価値を見出されていない。しかし、本研究では、このような楽器こそが、それぞれの地域の持つ音楽文化の一端を表すものであると考え、当時製作（または考案）された楽器と製作者の言説を通して、1鍵式フルートから多鍵式フルートへと移り変わる過渡期の様相を明らかにした。

本論文は、全6章と終章、結論から成る。概要を以下に示す。

第1章では、フルート作品における変化とフルートの楽器としての変化という2つの視点から、第2章以降で取り扱うフルート製作活動の背景となった事柄を明示した。

第2章から第4章では、それぞれベルリン、ドレスデン、ライプツィヒのフルートと、フルート製作者たちを取り巻く音楽環境から、各地域のフルートの持つ特徴を明らかにした。まず、第2章では、ドレスデンやライプツィヒとフルート製作においても影響関係の見られるベルリンを取り上げた。同地では宮廷が音楽活動の中心的役割を担っていた。そして、ここで活動していたヨハン・ヨアヒム・クヴァンツ **Johann Joachim Quantz (1697-1773)** は、現在では異名同音とされる音を異なる音、すなわち「異名異音」として区別するためにフルートへ第2の鍵を付加した。その一方で、クヴァンツ以降のほとんどの製作者は、自身のフルートにこの鍵を採用していなかった。

第3章では、ドレスデンの音楽環境と、主にグレンザー一族が製作したフルートに焦点を当てた。ベルリンと同様、ドレスデンでも宮廷が音楽活動の中心的役割を担っていた。そのため、同地で活動したカール・アウグスティン・グレンザー **Karl Augustin Grenser (1720-1807)** とヨハン・ハインリヒ・ヴィルヘルム・グレンザー **Johann Heinrich Wilhelm Grenser (1764-1823)** は、「宮廷楽器製作者」の称号を得ることで多くの顧客を獲得した。彼らは多鍵式フルートも製作しており、特に H. グレンザーによる8鍵式フルートは当時の標準型となった。

第4章では、ライプツィヒの音楽環境とヨハン・ゲオルグ・トロムリッツ **Johann George Tromlitz (1725-1805)** が製作したフルートに焦点を当てた。ライプツィヒでは、市民によって音楽活動が担われていたという点が、先の2都市との大きな違いである。ここでは、市民オーケストラで活躍していたトロムリッツが、クヴァンツによる第2の鍵を伴う多鍵式フルートを製作していたことを示した。

第5章では、クヴァンツ、H. グレンザー、トロムリッツ、そして彼らとも交流のあったユストゥス・ヨハネス・ハインリヒ・リボック **Justus Johannes Heinrich Ribock (1743-1785)**、及びハインリヒ・ヴィルヘルム・テオドール・ポットギーサー **Heinrich Wilhelm Theodor Pottgiesser (1766-1829)** の言説から、フルート製作に関する当時の問題意識と理念を明らかにした。クヴァンツ、トロムリッツ、リボックは、異名異音の区別と従来のフルートの音色を維持することを目指していた。その一方で、H. グレンザーは、自身も多鍵式フルートを数多く製作していたにもかかわらず、フルートへの鍵の付加には懐疑的であった。また、ポットギーサーは、異名異音の区別を否定し、フルートにも鍵盤楽器と同じ調律を推奨した。ここで、当時のザクセン地域には、異名異音の区別に重きを置く人々と、この区別をせずにクロス・フィンガリングの解消を目指す人々が存在したことを明らかにした。

第6章では、『一般音楽新聞 **Allgemeine musikalische Zeitung**』に掲載されたフルート作品に関する批評や広告から、ザクセン地域におけるフルート需要の高さ、アマチュアの層の厚さを示した。

そして結論へ進む前に、終章として、少し後の時代に目を向けて、19世紀以降のフルート製作に関して、主にバーム・フルートの開発と、それ以降も続いた多鍵式フルートの製作について述べた。これにより、フルートが決して進化論的には語ることはできない、それぞれの時代の多様な音楽観を反映した楽器であることが明示された。

以上を踏まえ、当時のザクセン地域では、異名異音の区別に重きを置く人々と、クロス・フィンガリングの解消に重きを置く人々の間で、フルート像の二分化が起こっていたと

結論づけた。これはすなわち、彼らが音楽において何を重視していたのかということに繋がっていた。前者は、アンサンブルにおける「純正な響き」を大切にしていた。一方後者は、フルートの「旋律」楽器としての側面を重視し、半音階や派生音の多い調でさえも自由に演奏することを追求した。さらに、このようなフルート像の二分化は、同地域における音楽文化の一端、ひいては都市ごとに多様な音楽文化を育てていた当時のヨーロッパにおける実態の一端をも示すものであることを導き出した。

## 審査結果の要旨

執筆者の博士学位申請論文は、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて、ドレスデン及びライプツィヒを中心とするザクセン地域で製作された「初期多鍵式フルート」について、現地調査して集めた楽器の構造に関するデータ、かつ、当時の楽器製作者たちのフルートをめぐる言説、当時のフルート作品の楽譜、さらに『一般音楽新聞 Allgemeine musikalische Zeitung』（AMZ）に掲載された作品に対する広告や批評記事から、この時代とこの地域に広がったフルート文化の多様性とその歴史的意義を明らかにすることを目的としている。楽器、言説、記事に関する膨大なデータを丁寧にまとめ上げた大変な労作となっており、世界的にもまだ研究がそれほど進んでいない分野に新たな光を当てた研究として高く評価できる。

これまで「多鍵式フルート」は、バロックフルートと 19 世紀に開発されて現在のフルートの原型となったベーム式フルートの間に製作された過渡期的な楽器として、音楽学において等閑視されることが多かった。また当時のフルート作品は主にアマチュア向けのものであることから、音楽史においてもほとんど重要視されてこなかった。しかし本論文は、ドイツのザクセン地域に着目して、都市ごとにみられる楽器の違いや各楽器製作者たちが理想とする響きの違いを丁寧に洗い出した。そして、Dis 鍵と Es 鍵の有無、C 足部管の有無、足部管のレジスターの有無、各製作者たちによる運指表、といった一見シンプルで即物的なデータに基づきながら、その背後に、異名異音にこだわり、「純正な響き」にこだわるプロと、フルートがアンサンブルのなかで旋律を担う楽器としてクローズアップされていくなかで、「旋律線」を奏でることを優先するアマチュアへと二分化していく様相を、明確な結論として提示することに成功した。また、AMZ の掲載記事から当時出版された作品をジャンルごとに分類して、当時どのような作品が推奨され、当時の人々がどのようにフルート作品を楽しんでいたかを考察した。

惜しむべき点があるとすれば、章によって先行研究を無批判に受け入れ、一般論に終始しがちなこと、基礎的な AMZ 研究や最新の社会史研究の成果にまでは手が及んでいないこと、また、膨大なデータを用いた割には結論が単純化され過ぎているきらいがあること、そして「異名異音」、「プロ」、「アマチュア」など重要となる用語の定義については現在の定義に寄り過ぎていることが挙げられる。しかし本研究は、ザクセン地域の初期多鍵式フルート研究としては世界的にも基礎となるものであり、他の楽器研究に応用できる示唆にも富んでいる。したがって、課程博士の学位を授与するに値する水準には十分に達していると判断するものである。

2020 年 9 月 15 日

博士学位論文 論文要旨および審査結果の要旨（第13号）

---

令和2年10月8日発行

発行 武蔵野音楽大学大学院  
編集 武蔵野音楽大学学務部  
〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1  
電話 03-3992-1128

---